

〇2歳 JO

レイプ願望&変態オナニー



女騎士の城

DOJIN
R18
成人向け



私の名前は四宮唯。年齢は〇二歳、地方都市の〇学校に通う二年生です。自分で言うのもなんですが、美少女だと言われる事が多いです。色々な部活に掛け持ちで所属しており、スポーツは得意です。勉強もそこそこ出来て正義感も強く、先生や生徒からの信頼も厚いと思います。一年生なのに風紀委員に推薦された事も、先生に期待されているからでしょう。



そんなある日、私が持ち物検査をしていた時でした。

男子が卑猥な本を学校に持ち込んでいたのを発見しました。

【唯】「ん？ 何ですかこれは……！」

【男子】「げえ！ 見つかったっ！ 隠してたのに！」

【唯】「こんな下らない物を持ち込んで…… 没収して先生に言うておきますっ！」

【男子】「せ、先生に言うのだけはやめてくれえ！」



【男子】「たのむ！ 先生だけは勘弁してくれ！」

男子は必死に謝っています。確かに先生にバレたら、家族にも知らされる事でしょう。そうなれば大事になるかもしれない。ですが、風紀委員として見逃すわけにも行きません。

【唯】「わかりました。先生には言わないでおきます。」

その代わり、その本は処分しておきます。いいですね？」

【男子】「ううっ…わ、わかりました！」

私は卑猥な本を没収し、それを自分のカバンに放り込みました。帰りに焼却炉にでも放り込んで行こうと考えたからです。そして放課後を迎え、部活を終えた私は帰宅しました。





【唯】「ただいま〜」

部活を終えて、くたくたになって帰宅すると、私はベッドのそばに座り込みました。流石に部活を掛け持ちしていると、披露も倍増です。

【唯】「あ、そうだ…パパもママも出張だった…」

「ごはん作らなきゃ…」

一ヶ月ほど、両親が海外出張になり、

私はその二ヶ月間、一人で生活しなければなりません。

とりあえずお昼に買ったパンの残りでも食べながら、

夕飯の献立でも考えようとカパンの中身を確認すると、

そこには、男子から没収した卑猥な本が入っていました。

部活の疲れで、焼却炉に放り込んでくるのを忘れていたようです。





【唯】「……しまった……こんな本持って返ってきちゃった……どうしよう……」

その本は表紙からして卑猥で、部屋のどこかに置いてても存在感抜群です。私がその本を意識しないようにしても、どうしても意識してしまいます。

【唯】「……少し読んでみようかな……?」

没収した卑猥な本を持ち帰って読むなど、風紀委員としてありえない事なのですが、好奇心が正義感に勝りました。私は恐る恐る卑猥な本を手にとってページをめくりました。

【唯】「うわっ……な、なにこれっ……!」

そこには、色んな服を来た女の人が、様々な男や道具で犯されている絵がありました。



【唯】「うそ、こんなの入っちゃうんだ…」

【唯】「水着姿って、こんな風に見ると凄くいやらしい見えるんだ…」

【唯】「そこをそうすると気持ちよくなっちゃうんだ…」

【唯】「うわっ…レイプって…うわあっ…中だ出てるっ…」

軽い気持ちで読み始めた本ですが、

そこには私の知らない性の世界が広がっていました。

コスプレ、オナニー、異物挿入、痴漢、レイプ。

子宮責め、中出し、露出プレイ、そして蟲姦。

【唯】「さ、こんな世界があったなんて…」

どれもこれも、私が授業で習った保健体育では得られない。

マニアックで背德的で興奮する内容の物ばかりで、私は強い衝撃を受けました。





【唯】「……」

いつものまじか、私は無意識に、自分の割れ目に指を伸ばしていました。ブルマの上から割れ目をこすると、とても気持ちがいいです。

【唯】「へえ……そうなってるんだ……
クリトリスが……んっ……」

私は卑猥な本でやっているのと同じようだ。

割れ目をこすりあげ、クリトリスを転がしました。

厚手のブルマの上からでは感じ方が弱いですが、

まるで自分が本の登場人物になって愛撫されているかのような、

そんな錯覚を覚えてしまい、指が止まらなくなってしまう。





【唯】「：直接触ったらどんな感じなんだろう！」

私は恐る恐るブルマとパンツを脱いで、むき出しになった割れ目に指を伸ばしました。

【唯】「ひゃんっー？」

クリトリスと割れ目に直接指が触れると、先程までとは違う、強い刺激が走りました。そして、自分の口から、まるで自分の声とは思えない、いやらしい響きを持つ声が溢れ出しました。

まるで自分が自分の体ではなくなってしまうたかのような感覚。

私は指を震わせながら、ゆっくりゆっくり、

割れ目とクリトリスを丁寧に愛撫していきましました。





【唯】「……あー！ ああああっっー！」

強すぎる刺激に体がビクンビクンと痙攣します。
それでも私は、指を止める事が出来ませんでした。

【唯】「ひっ……な、何が来るっ……？」

あひっ……！？ ああああああっっー！」

私がオナニーを続けていると、快楽の塊のような感覚が
割れ目から脳天まで突き抜けていくのを感じました。

【唯】「うぐっ……はあっ……はあっ……！」

私は生まれて初めてのオナニーと、そして絶頂を経験してしまいました。





【唯】

「はあっ…はあっ…」

「あ、こんなにも気持ちいいなんて…」

絶頂の余韻はしばらく続き、私は快樂の余韻に浸っていました。

【唯】

「指でオナニーするだけで、

これだけ気持ちよかったら、

セックスだとどうなっちゃうんだろう…」

やっと余韻が収まってきた私は、そんな事はかり考えていました。

セックスがしたい、中出しされたい、色んなオナニーがしたい。

しかし、私はまだ〇学生ですし、風紀委員です。

本来であれば、卑猥な本を読んでオナニーなど、しては行けない立場です。

卑猥な事はダメだと自分に言い聞かせながら、食事を終えて眠りにつきました。



